



Title	日本に於ける特異形態としての完全共同経営
Author(s)	阿部, 吉夫; Abe, Y.
Citation	法經會論叢, 14, 115-124
Issue Date	1955-10
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/10758">https://hdl.handle.net/2115/10758</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_p115-124.pdf



# 日本における特異形態としての完全共同經營

——奈良県心境同人社落の素描を中心として——

阿 部 吉 夫

## 一、宗教的視点と本部落（主體的把握）

独占資本主義体制下の共同經營、それは苦難に満ちた問題を内包し、斯かる生産關係下にある共同經營の存立は危機にさらされつゝある。我利我利をモットーとする外圍の中で、他の日本の農業共同經營が十年を出でずして崩壊するに拘らず、本心境同人社落が二十年近くも存続している事実、渡辺兵力氏の規定した「日本に於ける唯一の完全共同經營」の基盤が何処に介在しているのであるか。

本部落の如く發生の当初に當つて特定の宗教集団に關聯を有する精神的な共同体については、宗教集団を分析すると同様、唯經濟的或は社会的分析のみに終始するならば、その深奥の本質的なものを見逃し單なる封建遺制とか、半封建的と片づけると同じく空転した停滯理論となるであろう。例えばエンゲルスが宗教に対する視点は「一切の宗教は、人間の現實的生活を支配する外部的力が人間の頭腦に幻想的に反映することによつて發生する」ということに間違いないし、マルクスの謂う処の「顛倒された世界意識」としての宗教であることも当然であろうが、より密接に我々の生活感情にマツチした定型的表現はルカチエフスキーの「宗教とはアミニズム的觀念、及び、それに結びつく情操と行為の多少とも整つた体制であるところのイデオロギーである。そして社会の一定段階においては、これに、更に道徳が添加される」がより具体的に宗教の本質を示し得ると思はれる。

宗教の本質はあくまでも個人的、観念的、経験的なものである点から、一般理論によつてぬぐい去ることの出来ない本質的な部分の分析は、不可能であると思はれる。宗教の解明は宗教学によつて概略は把握されるが、個々の宗教は、その護教的な神学によつて把握されるにしても、その本質は宗教の性格の上から信仰によつてのみ把握され、その本質を極めて後、之を離脱して始めて適確なる批判をなし得、かゝる宗教の批判こそ、その「阿片」の本質を見極め、宗教消滅への途を促進せしめる理論を展開し得、且、その理論の現実への滲透を促進せしめ得るのであらう。

本部落を形成する中核体は、あくまで斯かる経営を通過した人々とは言えないが、身を以て反宗教運動を成功裡に導いた一つの典型といえるであらう。「人間はパンのみに生くるにあらず」と「人間はパンなくしては生くる与はず」の両側面の内、前者の過少評価は広くは経済学、狭くは農業経済学者のおちいり易い盲点であり、統一的視点に立つ各専門分野の共同研究なくしては特定の学的分野に極限された観念の遊戯たらざるを得ないであらうし理論と現実の統一は不可能であらう。農業経営のみで農業経営が発展せざること自明の理である。かゝる点から本稿は一つのか学的立場から眺めたものではなく、単なる同部落の特異なる視点より見た素描にすぎない。

## 二、心境同人部落の素描

京都より鉄路七六キロ、奈良より三四キロ、大阪湊町より三三キロ、奈良盆地が東の丘陵地にくびれ込んだ位置にある朝倉村は、東西二里、南北一里の狭小な農山村で、若干の商工業者、通勤者の世帯を除いて、総人口の七割余は近畿型の稲作を営む農家に属している。県道沿いの平坦部から東南の台地に道をとリ谿間の傾斜面に階段状につみあげられた水田の尽きるまで四キロ弱、小なる峠を越すと、地勢は谿沿いに東へ展開する。この台地にある笠間、安田の大字は、全戸が殆ど専業農家で、平均耕地面積一町二反に及び、朝倉大字八つの内、こゝで供出米の過半を受持つ。前者の笠間の大字に問題の心境同人部落が介在している。

本部落の創設者尾崎氏は、昭和十一年迄、天理教の教会長で、笠間三十戸の部落民が全部その信徒であつたが、天理教の中世的な封建制度とか、マジックの如き教理と宗教的行為で、信徒より膨大な金品を、神名を借用して奉捨させ、中央一部少数の宗教屋の豪華な生活、社会経済的に何等価値の存在を認めぬ巨大な建物築造に投下する現実や、或は自己自身も神名に依つて、半ば強奪的な信徒の奉捨

で生活する立場に矛盾を感じ、教会を共同農場に切換え、賛同した三戸の信徒の田畑九町、山林十町、で開始したが、其の後、困窮者、瀕淵引揚者、不良少年少女等を吸収し現在二十八家族、六十八名を有するに至つた。

かゝる点から、当部落の発生基盤は、表面上反天理教であるとしても私の理解としては、同じく親が天理教の教会長である戸沢光治良が自己の親の生活を描いた「ざんげの記」にも見られる如き、下級末端教会の悲惨なる豚同然の生活、その様な動物的生存の生活過程の中にあつても、心、肉体、財貨に貧しい人々の救済に専念した父母、及びそれを取巻く教会を通しての信徒の雰囲気の中にあつて、矛盾を感じつゝ、之を克服せんとする教会長後継者としては誰しも通る魔の関門であり、自己の生命は勿論、妻子を犠牲にしても、心貧しき人々を救わねばならぬ鉄の教理と、一方教会を取巻く外圍は、全くの我利我利である一般の資本主義体制との矛盾、今一つは部落、村内の物財に貧しい人々を救うべきを信徒より奉捨された物財の殆ど全部を上級教会より強奪される矛盾を痛感したことと思はれる。更に尾崎氏は率直且実に正直な人であつたが故に、この矛盾には而え切れなかつたことと思ふ。別の機会に尾崎氏は「天理教の教理そのものは結構なものだ」と述べている点から、全くの反天理教とは申し難く、最も嫌悪すべきは、天理教団の中央集権的な収奪体制に問題があつた様に思はれるし、現在の末端の教理に徹した教会が、受刑者、浮浪児、老病弱者を家族の一員として収容する前述した如き同じ形態が当部落にも見られる点からして、全く天理教の集団組織から離脱したにしても、反宗教的と目する訳にはゆかず、教理そのものを客観的、体系的に批判し得る能力の欠除に問題があり、知らず／＼の内に此の天理教的な精神を継承している多くの事実を私は指摘せざるを得ない。

前述の如き特殊な精神的支点の外に、幸なことには此等の四軒はいづれも村での指折りの資産家であるが為「経営外からの新資本の追加が殆どなくして、共同経営によつて生産力を高め、しかも今日迄二十年近くも存続し成功しつゝある心境同人物落の場合の高度な土地生産力は、主として水田の土地改良がもたらしたと言えるし、共同経営の土地改良が完成するには永い年月を要して居り、しかもそれはかなり激しい労働の強化を以て遂行されたものである。この場合、この労働強化に、屈せぬ前記の精神的支柱、(例えば、天理教の、Holy、の概念を、除いた、Holy、about、Service) を見のがし得ないし一傍点筆者一その間の部落員の生活は決して豊かなものではなかつた」水を呑めば水の味がする額に汗した労働の喜び、新しい世界建設の、又健康の喜びを味い得る信仰の体験者達であつたからであると思はれる。し

かし「今日では高い生産力の故に周辺の個別経営では実現出来ないような豊富な生活を送っている」のである。

しかして又、本共同経営開始の二年前は粗末な作業小屋を共同耕地の中間に建て、必要家財の持寄で営農を実施したが、農業労働及び生活の合理化と言う点から、農耕の傍ら殆ど自力で、家を毀して今日も現存している百三十坪の作業場兼倉庫と百坪の共同住宅を建設した。作業も勿論共同でやり始めたが、間もなく、各人の田畑が、村の各所に散在していることが甚だ作業能率を低下することを認め、交換分合を行ふ、それ等の田畑を全部共同住宅、作業場の周囲に集合せしめた、かゝる結果を見ることの出来た理由は土地生産力には大差ない共同所有地九町と、僅か三村の田畑という恐ろしく不平等な交換を行ったことに依る。

元来、保守的封建的な生活意識の支配的な地方であるから、宗教から離脱し、家族主義を徹底的に否定したこの共同生活は、開始当初、親類縁者から勘当せられ、村人は規約を設定し、当部落の者と話をして、挨拶をしても一回百円の罰金を取つたとか、或は戦時中当部落民は必敗を信じて、国防献金、隣組貯金もせず、又、生産より消費迄完全に共同なるが故に、反戦、反軍、共産主義、その他の名目で、尾崎氏以下五名は、桜井の留置所に八十日拘留され、従つて供出など随分過重に割当られたが、過重になればなる程、何くそと頑張り、彼等にとつて、それは一つの増産への刺戟となつたのである。

彼等の田は当初反当り二石二斗三斗であつたが、今日では四石乃至五石程度にもなつて居り、その間金肥は一切購入せず、一里先の榛原の町から、下肥を運び続けた結果であるとも言はれ、又、この地方は湿地で裏作は殆んど実施されなかつたが暗渠排水を施して、今日では、縊べて裏作が可能となつた。

こうして生産された余剰は絶対に残さぬと言う事が、彼等の始めからの経営方針で、それは余剰が出来る時、それが団結を破る根源になるとの考慮に基づき、従つて余剰は縊べて設備か、密附に変えられてしまふのである。

最近はこのため設備も充実し、村人も常に往来し、村の公民館の如き役割をなし、又、種々なる共同設備のための密附は村の大部分を引受け、最近の金詰りを外に、税金も査定より多く納入したとのことである。

又、村で作業が手不足で遅れている所があると当部落員は、早速農機具持参で援助に出動し、且「一粒一粒」も残さず丁寧に作業し報酬は一切受取らないとか、自費で榛原から一里の間を動力線を引込み心境部落の独力で村全体を電化せんとする計画もある。

しかし村の人々の融合し始めたのは終戦後の事で、世間から絶縁されるということが、如何に苦しいことか、大人は未だ良いが、子供は、そしてその子供を持つ親にとつては。勿論、終戦後にも幾度が融合する機会があつたが本部落民は自分達は何の不正もないとして固く今日迄謝罪を拒否し続けて来たが故に、終戦後急に村人が融合して来たことは、如何に彼等を喜ばしたことであろう。今日では村のイニシヤテイブは部落民によつて把握されている如く見える。

住宅は細長く両端だけが二階で、応接室・食堂・寢室・浴室・理髪室・炊事場に分れ、畜舎は創設当時の建物で二階に人が住み、成牛三頭、仔牛四頭を飼育し、内親仔二頭はホルスタインで、外は役牛、牛乳は全部自家消費している。割合広いのでその外飼料置場、倉庫、農具置場、屋内作業場の外、堆肥小屋を附設している。鶏小屋には鶏三十羽、アヒルが二十羽、兎が十四程飼養されているが皆自給用で販売はしない。

戦後建築した農産加工場では動力での脱穀機三台、調整機二台、精米・精麦・精粉機各一台・製繩機二台・床締機二台・小型トラックを備え、特に製繩は月五千貫を製し、製疊は月七〇〇枚の生産を挙げ、製品も優良で評判がよく、附近の大都市大阪、神戸の戦災を通じて需要が多く、且原料の粟は一貫岡山二十円、香川二十五円で購入しても利潤があるに拘らず、本部落では八円で購入し得るので生産原価を低め従つて市価より二割安の価格で販売しても月二十五万という個別農家の一ヶ年の現金総収入以上の純利益を挙げて居り（昭和二十四年）本部落の現金収入の大宗をなしている。更に糞屑は堆肥の原料として大きな役割を果し、製品の見返りに依る硫酸の獲得にも役立つたとのことであり、その外、蕨織機二台による吠、蕨の製造、販売用漬物製造も行い、苧麻の油で石鹸を、菜種油を食用、棉を栽培して木綿糸と普段着を自給し、燃料の木炭は十町歩所有の山林から農閑期に千俵生産され、塩と鉄のみが自給圏外にある。

サイレンで食事時間を報ずる外、時間の規正はなく自由稼働方式、但し日曜日は必ず炊事、養畜除き全員休業である。共同経営は個別経営より労働能率を低下することが常識であるが、此の部落では一層高められ、之は個人の物慾というものが全く排除され、衣食住が共有共同であつて各人の作業能力とは全く関係がないからであらう。

年令別構成は十五才以下十八名、十六〜二十才十二名、二十一〜六十才三十三名、六十一才以上一名。出身地別では三十七名笠間部落出身、残二十七名四国・近畿出身。前職の構成では、農業以外十三名、残は農業。血縁関係では尾崎家関係十二名、十名一家、六名三

家、二名四家、単独者十二名である。

斯くの如き様々なる人的構成によつて營なまれる共同生活は、財貨の共有、共同使用が徹底し、分業による協同が生活の隅々迄ゆき渡り、個人本位、家族本位の生き方が全く見られず、例えば衣服等も作業衣、夜着、外出着も各人に行き渡るに充分であるが、個人所有は下着類に至る迄一つもないから、洗濯、修理の都度変ることになる。寢室や同室者の組合せも同様の趣旨で交代するし、子供達は、常々両親より子供係の世話になり、夜も親と同寝することは殆どない。個人の訪問の縁者、知人は皆の客として饗応を受けることが普通であり、現在難なく実行されているこの生活慣習も当初は相当困難であつたとのこと。共同経営の難点の一つの分配問題も、家計の分立のない此の部落では問題ないが、使い馴れた祖先伝来の家具調度や個人の持物を誰彼の区別なく使用することは永年の慣習と愛着が邪魔をし、かくしてトラック何台分かの家財が思い切つて売却はれ、共同生活に必要なより少い新品が購入され、絹布団、晴着は縫い直され、各戸所有の牛四頭は別の三頭と交換された如き其の他にも数多くの事実がある。食事は勿論共同炊事で食堂に一堂に会して食べ、子供は発育状態や体質に応じて六級、大人は労働によつて七級に分ち、一級の差が十匁で、各自の申出に依つて級別の飯が盛られる。炊事場は八升釜三箇を揃え、水道を引いて便利で清潔を旨とし、水は山上に掘られた大井戸から一日六十石の水が湧き、家中蛇口さえ捻れば勿論常に水が送り出る。

共同生活の運営は日曜は昼食時、外の日は夕食時、常会を開き、成人男女が交代で司会者となつて、食事をとりながら各係から作業についての注文や割当が述べられ、生活や運営の仕方について一定の形式を固執しないこの部落では、万事はこの毎日の常会での発言や協議で必要の都度決定される。子供の代表が一日の生活を大人に報告するのもこの機会であり、其等が終了すると食卓順に演芸が行はれ、老若男女を答はず流行歌や唱歌に笑い興じ、こうして昼間の作業の疲労を発散させた後は寝る迄思い思いの時を過す。之について尾崎氏は「農民に時間の余裕を与えること、衛生的な規則正しい生活によつて精神的、肉体的健康を保つこと、気苦勞と生活の不安から解放すること」この三つが農民生活上の根本であるとしているが、現在の日本農民生活の現状では一応考慮すべき言であらう。

又次の様に係がきめられ、その責任と管理の下に總べての作業が運ばれて行く。

○作業係（男二名、園芸以外の作業全般、田・畑・山林・加工、各部五人位で編成）

○園芸係（男二名、蔬菜・種苗の栽培管理）

○畜産係（女二名） ○道具機械係（男二名）

○炊事係（女二名） ○子供係（女一名）

○衛生係（女一名、保健衛生、元某病院の看護婦長、経験年数十四年の者あり）

○内政係（女二名、金銭出納、農場内外の整理、並びに接待）

各係の任期は一週間、責任者は選挙できめられ、内政係は炊事係を、畜産係は内政係を勤めた後でなければ、なることが許されない。というのは、ものを言う人間の食事から身の廻り一人前とならねば、ものいはぬ、家畜を養うことが出来ないと言うにある。

本部落の特徴の一つは一般農村に見られない恋愛至上主義で、皆が見ていて最高の恋愛状態に達したと思はれる時結婚を許し挙式をするが、簞笥・蒲団・結納は言うに及ばず、式服は一組で間に合つて居り、御客は部落全員であり、式服より式を重点に置き、式が終了すると別棟の一室を与える。風紀の問題については、七十人近くの目を盗んで何事も起る心配はない。又婦人の生理日については、保健衛生に注意が周到に払はれ作業も軽労に限定される。一般家庭に見られる犬も喰はぬ夫婦喧嘩は全く見られず、数学的に表現すれば夫婦二人一人、更に六十八人一人であるから。

特に興味のある点は、昭和十八年より帳簿記入の事務処理を廃止し、例えば内政係は、次の内政係に現金在高の確認もなしに引継ぎを行う如く事務的手数を排除し、之は又相互信頼の徴表でもあろう。個別農家の記帳能力の欠除や、過労に依る怠慢とその理由を異にする。又、尾崎氏は勿論、部落民も現在本部落居住民が何名かさえも確実に把握していない実情で、此の部落の経営経済的且統計的な把握は頗る困難である。例えば尾崎氏の言より米の生産供出保有量等を概算すれば、

生産量 158.4石（4.8石×33石） 一供出量 10.0石＝保有量 148.4石

保有量 148.4石＝食糧 74.8石（1.1石×68石）＋種子 1.6石（0.05石×33石）＋杂用 11.0石＋自由販売可能量 71.0石

となり自由販売可能量は生産量の四五％に達するが自由販売はしないと言う点から大きな矛盾を結果する如きである。

### 三、諸氏の結言とその批判

先づ京大の飯島氏は「第一に考えられることは、之が決して個人の利益や主義、主張から始つたものではなく、迫害の結果、全く自然発生的に始つたもの、従つて各人の精神的な団結が強固であつたと言ふこと」であらうとしているが、尾崎氏の一つの特異な主張が当部落が発生した当時から見られるし、自然発生的に始まつたものだと言ふことは困難であり、精神的団結の強固な本質が奈辺にあるかも見落している。「次に共同経営に参加した範囲が極小人数で、何れも村で有数の資産家であつたということ」を挙げているが、何故かゝる資産家が、その資産を共同経営に投下する原因になつたかが理解することができないであらう。「最後に尾崎氏の如き稀に見る指導者を持ち得たということであらう」と述べているが、優秀なる指導者の人間形成の基盤は何であつたかと言ふことは明瞭でなく、尾崎氏の如き人物は天理教人には数多いが、大阪に於ける賀川豊彦氏が貧民窟における生活に比較して問題とならぬ程の苦行に満ちた天理教的な生活形態から生み出されたものであると思う。

次に厚生省の中島氏は「第一に中心人物たる尾崎氏の人格と指導力の勝れていること。第二に同氏を中心にして年配者の同志的団結が固いこと。第三に同人の多くの人が人生の不幸や辛酸を経て来たこと等」がこの様な生活を存続した所以であると述べているが、何れも皮層的見解であり、本文中にも述べた如く、自己の物慾を捨てるために、財貨を奉捨し、自己の労働の奉捨し、自ら苦行を求めてする天理教人としての生き方、如何なる人生過程の不幸や辛酸に遭遇してもそれを喜びに換へ得る信仰の奥義の体験者達が中心であつたからであらう。

更に農経研の渡辺氏は「十分な信用が個別経営では得られず、共同化によつて新資本を得て、新結合を創出する場合、さらに経済的圧迫に対処するため、生産活動を共同化し、その実結果において生産力の発展が起きた場合である」又「個別経営から一気に全部的共同経営に移行することは一般に困難であり、その困難な理由は今日の農業の技術水準と農業生産関係及び農業を囲む一般経済環境を前提とする限りにおいて困難であり、これが前述の条件の下で存続するためには、そこに特定の条件がなければならぬ。一例として心境共同経営の如きは完全共同経営に移行して成功しつゝ長く存続している稀な実例である。心境共同経営の成立にはこの独特の立地条件と人的条

件があつて始めて可能であつたのであつた。これを以て共同経営の一般的事例と見做すことは出来ない。」と述べているが、立地条件と人的条件の内容が不明であるが、この二条件は並立すべきでなく、本部落の場合は精神的結合を支点とする上からの条件に優越性を認むべきであらう。

#### 四、要約と問題点

簡単に要約すると精神的結合に焦点を置き之が為、当初の不等価な交換分合、旧資産の価値以下の売却等の非経済的行為が強行せられている。この基点は一応天理教教理中非近代的なものを除去した所謂天理教的精神であり、利潤追求は二次的とし部落の生活の合理化に意を用い、潜在的指導者たる尾崎氏の実践的な修養が中心点となつている。しかして多数の外來者（一日平均十名）に無償で食住を供し総ゆる人の言を受け入れ農業の近代化に努力し、大巾な共同経営の収支均衡を考え、特に余剰は公共に奉仕すると共に困窮者を吸収し、経営の工業化、有畜化に努力し、将来の農民恐慌に対応しての有利なる農産加工に転化する多様性ある企業的手腕に秀で、消費材購入面よりの収奪を防ぐための自給生産の拡張に努力している。又、徹底的に民主且自主的に運営され、利益享受の平等、肉親にも及ばぬ情愛が確保され、部落内には階級的組織及び意識は全くない。

問題点としては、Robert Owen の New Harmony の如きユートピアであるが現資本主義社会との垂離が甚だしく、養生の精神的基礎が特異であるため、内展は漸次行はれていくが外展の可能性は殆どない。指導者尾崎氏には子無しで部落の青少年を子供の如く愛する様に見え、もし彼が子あれば私利心を助長し、斯く迄純粹に部落は成長しなかつたとも思はれる。（但、天理教では自己の子より他人の子を大切にす教理はある）。

以上は最少の集団としての家族形態は止揚したにしろ、一部落としての極く少部分社会の共同経営乃至共産生活に過ぎないが、エンゲルスが「全社会の手による共同経営と、その結果として、それから生じて来る所の生産の新発展は、従来と全く異つた人間を必要とし、又それを作り出すであらう」と言うことは心境同部落の養生及び発展過程においても、此の事象は適用されるであらう。この部落を孤立した一小社会として抽象して見た場合においては、しかし問題は其処に止まつているのみである。本部落は、日本農業の支配的形態で

ある前資本主義段階の生産方法と同一範疇に属する点からして、エンゲルスの意味するが如き資本主義的な職能分化の一步前の段階では生産の共同経営も出現し得たし、かゝる生産方法の段階では、それに要する智識技能も経験の集積程度で充足可能である点からかゝる共同経営も成立し得たのであらうと思はれる。本部落の内部においては、規模の零細な点から、低度の技術の点から耕種から養畜え、養畜から製鹽え転職することは不可能でないし、その様なことは現実にも行はれて居り、階級構成等も成立していない点から問題はないが、現在耕種に従事し、次に東京で株屋でも始めたいと言ふことになる問題をもとし、その様な個人の意欲を発生せしめない保証は外圍が資本主義社会たる限り困難であらうし、本部落を包む環境が共同土地利用さえ行い得ない現状においてこの生活圏を拡大する基盤を求め得ないし、土地の借入身体も零細農耕下の環境、並びに本部落の共有精神にも反する点から頗る困難であり、農耕面の発展が制約されるとすれば農産加工業への発展以外になく、之も專業的大経営にはコスト並びに販路において対抗し得ず、資本主義的外圍の収奪を防御するためには必然自給自足の共同経営の強化を計らねばならずかゝる進行は外圍との逆進關係に立ち、生産力の発展は望み得ないし、生産力が拡張しない限り、部落民の教育レベルも向上する基盤を失い、且その教育が資本主義体制下の教育機関でなされる以上、次の世代に与える影響は必なしとしないであらう。勿論社会主義体制下の共同経営と本質的性格を異にする日本の形態の特殊共同経営として本部落の将来は、やはり日本資本主義の制約を受けるにしても、その崩壊のためのささやかな役割はにない得るし、反宗教運動の拠点としても又日本農業共同経営の特異な一つのモデルタイプとしての意義は持ち得るであらう。(一九五四・一一・二〇脱稿)